

年間第二十六主日

2014.9.28

マタイ 21・28-32

東京大司教区 森一弘司教

二人の兄弟が父親から「畑に行ってくれないか」と頼まれます。ところが、一人は「はい」と言いながらも、弟の方ですが、結局は行かなかった。兄の方は、最初は「いやです」と答えながらも、あとで考え直して畑に行きました。今日のキーワードはおそらく「考え直す」ということばのような気がいたします。というのは、「考え直す」ということばは、今日の福音には二回出てきます。最後の結びのことばもそうでした。「考え直す」ということがどういうことなのか、皆さんとご一緒に、この福音に沿って確認してみたいと思います。

兄貴の方は最初「嫌です」と言います。「嫌です」と答えた動機、理由はなんでしょう。「お父さん、実は今日はゴルフの約束ですからいけません」というのもあることです。あるいは、今日は仕事の打ち合わせがあるからそんな余裕はありませんよ」というのもあるかもしれない。また、「お父さん、今日は疲れてしまってますから」というような理由もあるかもしれません。あるいは、もっと深い事情があったかもしれません。「自分は親から離れたい、親との関係を切って生きているんだ、今更手伝ってくれって言っても何か違うんじゃない？」というような親子の断絶が底にあったかもしれません。ところが、彼は考え直すわけです。考え直すということは、彼の心の中に何か浮かんできたんです。おそらく、自分のゴルフとか仕事とか付き合いとか、自分の疲れとか、お父さんに対する怒りとか不満とか、いろいろなものがありながらも、何か別のものが見えてきたということかもしれません。それは何でしょうか？ 多分、「親父もう疲れてきたんだろなあ。弱ってきたんだろなあ」という、親父にたいする何とも言えない優しさが出てきているかもしれません。あるいは、「考えてみれば、自分も幼い時からずっと親父によって生かされてきたんだ。親父がいなければ、今の自分はなかったんだ」というような、「親父にお世話になってきた。だから、やはり親父を助けよう」というような思い起こし、それが「考え直す」ということばに表現されているかもしれません。言い換えると、親によってどんなに大事にされてきたか、親にどんなに愛されながら生きてきたのかという、親から受けた恩義というものが彼の心の中にまた大きく浮かび上がってきて、で、畑に向かって行ったのかもしれません。

考えてみますと、わたしたち、今日ここにこう立ってられるのも、背後に

実に様々な人のお世話になってきている。その事実は否定できない。この事実を小学生や中学生の子どもたちに分からせるためにこんな話をします。

例えば、ある母親がいて、子どもたちに、どんなに人は人によって大事にされて、それでようやく生きていくことができるんだということを分らせるために、ある母親はこういうことをやる。今の社会では、例えば自動販売機でペットボトルを買おうとすれば150円。そうすると、母親が赤ちゃんに「お前、私の乳を飲んでもいいけれども、5分間飲むと外だと150円取られるかもしれないから、お前、5分間飲むだけで150円のツケにしておくよ」と言ったら、どうです？ お乳から離れるまでにどのくらいの額になるでしょう？ 更に、お母さんがこう言います。「今の社会だと、家のお手伝いさんとか家政婦さんとか介護の人をお願いすると、週休二日で1か月だいたい20万から30万払わないといけないんだよ。お前のために自分は一所懸命やるけれども、朝9時から5時まで働くとすると、お前は私に20万の支払いをしなければいけないんだよ。それだけですまないんだよ。お母さんは土日も働くんだよ。休日手当が必要だよ。それから、更に、お前は朝9時まで待ってないよ。だから、その前にお母さんは働くわけだから、早朝手当が必要だよ。それから、5時で終わらないから残業手当だよ。更に、夜泣きしたりなんかするから、夜勤手当も必要だよ」って、それを全部付け加えていくと、どのくらいの額になってしまうのでしょうか。おそらく大変な額になります。「そして、更に、お母さんはお前のために食事を準備するよ。今、外でカレーライスとかラーメン食べるとだいたい五百円だとすると、お前のために安くしといて、一日の食費を千円にしておくよ」。で、こういうものを全部ツケてツケてツケていったらば、子どもがお母さんに払うことができるのでしょうか。で、母親はこう言うわけです。「お前が働くことができるようになって、給料をもらえるようになったらば、ローンでいいからゆっくり返してくれ」って言ったらどうでしょうか。4億か5億くらいになっちゃっているでしょう。それを、娘か、あるいは息子か、支払っていくことができるのでしょうか。おそらくできない。

「返さなくてもいいんだよ」っていう親の心があるからこそ、この一人の赤ちゃんは成長していけているわけです。つまり、一人の人の人生の命には、あるいは人生そのものには、報いを求めないで、ただひたすら「幸せになってほしい」と一所懸命尽くす心があるからこそ、一人ひとりが生きてこられる。

しかも親がもう少し残酷だったらどうでしょう。「お前はわたしを散々悩ませたよ。苦しませたよ。だから慰謝料が必要だよ」って言ったらどうなるでしょう。親を必ずしも喜ばせては生きてきていない。いろんな意味で傷つけているかもしれない。でも、親はそれを乗り越えてやっている。子どもの幸せのため

に、とにかく自分はどんなに傷ついても、疲れても、こどものためには一所懸命自分の人生を与えつくそうという、そういう親の人生がある。そう考えていくと、わたしたちの今立っている、わたしたちの今というものの背後には、実に多くの人々の人生の重さがある。実に多くの人々の愛の息吹によって支えられ、生かされてきているということがある。この重さをわたしたちはどれほど自覚して生きているでしょうか。で、このこどもたちが結婚して、みんなから結婚披露宴会場で祝福され、「おめでとう」って言われる。そして、披露宴の終わりに若いカップルがお父さんお母さんに向かって「わたしたちが今日こんなに幸せなのはお父さんお母さんのおかげです」っていう一言で、親は自分の人生が報われたと思う。苦勞してきた甲斐があったっていうその実感を得ることができる。つまり、自分の損得を超えて、相手が喜ぶ姿で自分の人生を肯定する人がいるお蔭で、わたしたちは生かされている。

たとえ話の兄貴はおそらくそれに気が付いたのかもしれませんが。イエズス様のメッセージの背後にあるものは、「わたしたちの人生の深いところには神の愛があるよ。神があなたを支えるためにこのようは親を与え、親を通してあなたを一人前にしたんだよ。神から愛され、親から愛された今がある」。そこから生まれてくるものは、感謝と、親にいろんな意味で迷惑をかけてきたことに対する「ごめんなさい」という言葉です。神から愛されているっていうことをしっかりと見つめて、神に感謝し、わたしたちがいろんな意味で自分勝手に生きていて苦しめてしまうことには「神さま、ごめんなさいね」っていう、そういう感謝と「ごめんなさい」への招きのたとえ話と考えてもいいかもしれません。人生の究極の完成はすべてそこに行ってしまうのではないかと思います。

今日、わたしたち、敬老の日ですけれども、わたしたちの今日あるこのわたしたちの幸せを多くの人たちが自分の人生をかけて作り上げてきてくれた、その恩義の上にわたしたちは立っているっていうことを改めて自覚しながら、年老いた人たちには深い感謝っていうのをお互い同士口にすることができますよ、神の光と力を願いながら、一緒にこのごミサを進めてまいりましょう。